

# 万葉集

万葉集・・・奈良時代 現存する日本最古の歌集。

素朴で雄大。生き生きと力強い

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山

春が過ぎて夏が来たらしい。真っ白な衣が干してあるよ。天の香具山に。

持統天皇

白たへ↓白い布

句切れ↓二・四句切れ

文法↓体言止め

ポイント

天の香具山に真っ白な衣が干してあるのを見て夏が来たのを感じた

ひむがし

かぎろひ

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

かたぶ

柿本人麻呂

東の空にあけぼのの光が差してくるのが見え、振り返って見ると、  
月が西の空に沈んでいこうとしている。

炎↓あけぼの（明け方の光） 句切れ↓句切れなし

ポイント

明け方の情景。非常にスケールが大きく、広大な宇宙をよんだ雄大な歌

君待つと吾が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

あなたを待つて私が恋しく思っていると、我が家戸口のすだれを動かして  
秋の風が吹いていきます。

額田王

恋ひ居れば↓恋しく思っていると 句切れ↓句切れなし

ポイント

好きな相手のことを想う女性の繊細な心をよんだ歌